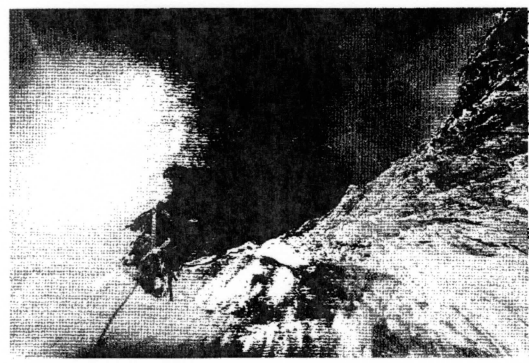


ンナーが取れた。時折大きなスノーシャワーに身体を剥がされそうになるのを耐えながら、2P で岩場を越える。期待していたテントサイトはすぐには見つからず、ルートとは逆側の急雪壁を3P 登ると、雪崩を避けられる雪稜に出られた。細い雪稜ではあったが、なんとか2人が横になれるスペースを切り崩し幕営。

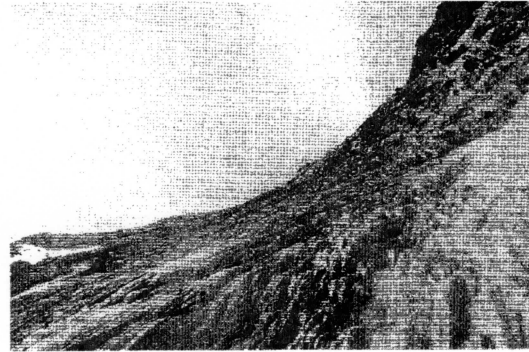
8月20日、昨日からの積雪が少しでも安定すればと、壁に陽が当たってから出発。昨日余計に登った急雪壁を2P 懸垂下降してルートに戻る。さらに冰雪壁を左へ3P トラバースすると、第2の岩壁基部に達する。傾斜は大してないものの(60°)、大きなスラブ岩に雪や氷が乗っかっているだけで見るとからに悪そう。さすがにトップも空荷になってトライ。前半はスクリュウが半分まで入って効いてるかどうかわからないプアプロテクションでなんとか進めるも、中間で氷も雪もないスラブ岩に支点が取れなくて時間を食う。そろそろふくらはぎも腕も限界に近づいてきてしまったので、意を決してノープロテクションで突っ込む。するとなんとか氷にアックスが刺さり、足ブラになりながらも、次の一手が出せた。こんな高所で気合いの声が出てしまったのは初めて。なんとか氷で半刺しのスクリュウでプロテクションが取れて気が緩んだのか、次の一手でアックスが外れフオール。フオール中は中間ランナーが走馬灯のように思い出されたが、奇跡的にどれも抜けず、怪我なく止まった。なんとかクライミング再開し、1P で岩場を突破することができた。終了点からは3P 冰雪壁をトラバースして「く」の字冰雪壁をひたすら登る。この頃からまた雪が降り出し、スノーシャワーが降り注いでいたので、確保しながらの登攀となった。冰雪壁を登りきったリッジを切り崩して幕営。

翌21日、昨夜から降り続いた雪は、何度もスノーシャワーとなって襲い、テントの半分以上は埋まっていた。朝から止む気配がなく、視界も悪いため1日停滞日となる。順応高度を越えてのビバークの為、中島は高山病の影響が出ていて食欲は無くなっていた。

22日、予定していた核心部(岩場)も抜け、標高差的には山頂に届く高度であったので気張って早起きするも、まだ雪は止んでない。視界が開けた6時ようやくテントを出発する。昨日までの降雪で



▲between C2 to C3



▲near C3

